

日本ハンセン病社会事業史研究(第8報)

- 「らい予防デー」の成立過程の検討 -

平 田 勝 政

A Study on History of Social Work for Hansen's Disease Patients in Japan (8)

Katsumasa HIRATA

1. 研究の目的・方法・倫理的配慮

本研究は、1930年代の「救癩」運動を「癩(らい)予防デー」に注目して検討し、隔離主義の日本的ハンセン病社会事業の確立過程を実証的に解明していこうとする研究の続報である。本稿では、平田(2015)¹⁾において不明な点を残した「癩(らい)予防デー」の成立過程(1931~1933年)をより詳細に解明していこうとするものである。具体的には、1931年6月25日を中心とする「癩病根絶期成同盟大会」の地方開催で不明であった大阪府、兵庫県、鳥取県、岡山県(津山)と不十分さを残した青森県の実態²⁾、1931.6.25以降の癩予防協会による啓発活動と1932年6月25日の取組・提案、1933年6月25日における「癩(らい)予防デー」の成立とその後について検討し、最後に「癩予防デー」を開始年と成立年に区別した統一的把握を提示するものである。

なお、既に「癩」などの表記に見るように、人権尊重の見地からすると不適切な用語が使用されているが、以下でも歴史的用語として使用することをお断りしておく。

2. 1931年6月25日の地方における「癩病根絶期成同盟大会」の開催状況

(1) 青森県(弘前市)の場合

青森県では、弘前市で開催された。1931年6月12日の「弘前新聞」³⁾は、「希望社の講演会、癩予防協会の趣旨に賛して」との見出しで、「皇太后陛下が癩病患者の不幸に御同情遊ばされ、巨額の御下賜金を賜はった思召しを奉体し、内務省の癩予防協会の事業達成を助け、尚東郡新城村にある北部保養院を慰問の為め希望社弘前聯盟では廿五日午後から市公会堂に於いて『畏き思召を拝受して癩の予防に就て』と題する県衛生課長山本憲一氏の講演並青山学院教授水木音彌氏(伴奏清瀬保二氏)の音楽会を開催の筈である」と報じている。さらに続けて希望社弘前聯盟の成田弘の談話を、次のように紹介している。

「誤った天刑思想から我々日本人は癩患者は勿論その家族子孫迄をも甚しく虐待して来たが、この病は明かに伝染性癩病菌の然らしむる病で決して天刑でもなければ遺伝でもない事は専門家の発表している処である。ノ六月二十五日を『癩病予防デー』と定め聖慮に副ひ奉ると共に予防、慰問献金運動等を行ふべきである。ノ癩病予防乃至根絶は易々たり。毎年二百万円宛二十年にて根絶する事を政府は発表しあり。愉快な事ではありませんか、此の運動に対する事業には大に賛同しやうぢやありませんか。ノ割当方法を待つ迄もなく県民お互は二十人力、三十人力一人当り二銭宛の少額募金の労を惜しまず県知事を経て内

務省癩予防協会へ送金し根絶運動の促進をなすべきであると思います云々」

平田 (2015:71頁) で鹿児島県の地方紙「鹿児島新聞」(1931.6.25) が本邦で最初に「癩病予防デー」を見出しに使用・報道していることを確認したが、「癩病予防デー」なる表記の使用は「弘前新聞」(1931.6.12) の「希望社の講演会」報道の方が先で本邦初である。

(2) 大阪府の場合

大阪府では、1931年6月27日に開催されている。その開催の案内を「大阪朝日新聞(大阪版)」⁴⁾が、次のように報じている。

「希望社大阪府聯盟では癩病根絶期成同盟会の資金募集のため大毎慈善団と朝日新聞社会事業団後援のもとに來る二十七日午後一時半と午後六時半の二回朝日会館で講演と映画の会を催し、柴田知事、阪田幹太氏、村田外島療養院長らの挨拶ののち、ソレルとその子、キートンの決死隊の映画がある。」

当日の「大阪朝日新聞」⁵⁾が報じた開催案内の記事は、下記(左)に示すとおりである。

開催翌日の「大阪朝日新聞(大阪版)」⁶⁾は、大会が「祖国の血を浄めるために」をモットーに昼夜二回とも満員で盛会を極めたと報じている。講演では、柴田大阪府知事が「畏きあたりの思召によりこの運動が今や国家的の運動となりつつあること、特に各種の修養団体は協力その実績を挙げられたい」との希望を述べ、村田外島療養院長は「従来天刑病または遺伝病として誤解されていた同病は一種の

伝染病に過ぎないから完全にこれを隔離すればここ数十年後には絶滅し得る確信がある」と隔離主義を強調した。また、上記のモットー「祖国の血を浄めるために」はその後に継承されていく。

(3) 兵庫県の場合

兵庫県では、1931年6月25日に神戸で開催されている。開催4日前(6月21日)の「大阪朝日新聞(神戸版)」⁷⁾が「神戸の奥村少将が中心となって組織されている兵庫県癩病根絶期成同盟会」が県市の後援を得て「講演及び映画の会」を開催すると予告し、大会当日の同紙では「癩病根絶期成会で資金を募集する、廿五日講演と演芸会」⁸⁾との見出しで、次のように報じている。

「洪澤子を会長とする癩予防協会が生れ同会の事業を達成するため今回各府県に癩病根絶期成同盟会ができ、今廿五日を期しそれぞれ募金に着手することになったので、本県では同期成同盟会の主催、兵庫県と神戸市の後援により二十五日午後一時からと午後六時半からの二回、神戸下山手青年会館に講演と演芸の会を催し、この総収入を協会に寄附することになった。プログラムは左の如し(会員證五十銭)。

挨拶 岡知事、講演 村田外島保健院長、ヴァイオリン・ピアノ合奏 佐野堅太郎氏・竹内千代女史、未来派舞踊 守石社中、琵琶講談 水也田吞州氏、心靈化学応用奇術 マリニー氏夫妻」

村田院長の講演内容は、不明であるが、前記の大阪講演と同趣旨と見てよい。

(4) 鳥取県(米子市)の場合

鳥取県では、米子市で開催されている。6月23日の「大阪朝日新聞(鳥取版)」⁹⁾は、「レブラ根絶講演会」との小見出しで次のように予告している。

「レブラ根絶期成同盟会米子支部では、米子市役所、同警察署、同婦人会の後援を得て二十五日午後七時半から市内啓成校においてレブラ根絶の講演とレコードの夕を催し『癩病について』太田實雄氏外数氏の講演があり、レコードコンサートを行ふ。」

希望社機関紙の「希望の日本」¹⁰⁾によれば、「米子に於ける大会は同志の涙ぐましき迄の奮闘のかいもなく集りが非常に少く」て小規模に終わったとされているが、「癩病の二字を植え付けただけでも立派な功績である。」との評価を与えている。

(5) 岡山県(津山市)の場合

津山市では、光田健輔愛生園長を迎えて6月21日に開催されている。「大阪朝日新聞(岡山版)」¹¹⁾は、「悪病予防講演」との小見出しで次のように報じている。

「レブラ根絶期成同盟会と希望社津山市聯盟主催で来廿一日男子小学校においてレブラ予防の講演と趣味の会を開く。当日は国立レブラ療養所長光田健輔氏の『レブラの予防と根絶』と題して講演があり、余興に仕舞剣舞などがある。」

小見出しとはいえ、「悪病」=「レブラ」=「癩」という否定的印象を流布している。講演内容は不明であるが、光田講演の演題「レブラの予防と根絶」は、6月25日のJOAKからのラジオ講演「癩病の予防と根絶」と基本的に同じであり、同趣旨と考えられる。

2. 1932年6月25日における「癩病根絶期成同盟会」の取組と「癩予防デー」の提案

(1) 三室戸敬光の講演(1932.6.25)

希望社の後藤静香の要請で「癩病根絶期成同盟会」の会長に就任(1931.5.25)していた三室戸敬光は、没落寸前の危機的状況にある希望社に代わって主導性を発揮し、1932年6月25日にJOAK(東京)より婦人講座として「国民の保健とらい病」と題するラジオ講演をおこない、1931年6月25日(光田講演)との連続性を保持した。また同盟会本部は、「六月二十五日の皇太后陛下御誕生を記念する為二十より二十六日迄の一週間を特に癩運動週間とし、二十六日には日本青年館に於て音楽と舞踊の会を催」¹²⁾し、さらにパンフレット『祖国日本の名誉と恵まれざる人々のために』を発行して運動を継続させた。

三室戸の講演要旨は、JOAKの受信可能な関東地方を中心に、「東京朝日新聞」「読売新聞」「国民新聞」「都新聞」「二六新報」「時事新報」等が掲載し、遠くでは山口県の地方紙「馬関毎日新聞」も報じている。報道された講演要旨には若干の相違はあるが、大差はない。ここでは「東京朝日新聞」¹³⁾を中心に三室戸講演の要旨を見ていく。

その内容は、次のとおりである。

「二十五日は畏くも皇太后陛下の御誕辰の目出度き日である。毎年この日を迎へ申上る度に、陛下の崇高なる御仁徳を景仰し奉るのですが、殊に一昨年来特に御仁慈の深きに感激し、その尊さに痛く胸を打たれました事は、世にも不幸なるらい患者の身の上に垂れさせたまへる御慈愛の御心(光明皇后の御事蹟にもましたる御慈愛御同情の御事)であります。されば陛下(茲をもちまして御仁慈深き皇太后陛下)の御誕辰当日、常に御心痛(御軫念)浅からざるらい病に関する御話を皆さんに申上るは意義ある事と思ひます(決して無意義ではありません)。即ち一はこれを以て陛下の御徳を

たたえまつり (称へ之によりて今日を御祝ひ申し上げ) , 一は以てらい病に関する認識を一般家庭の方々に深めていただき , 一日も早くこの病の根絶を期する為の国民運動に目覚めたいのであります (目覚めていただく為に外ならないのです)。(下線は筆者。括弧内は「都新聞」)

三室戸講演は、「一日も早くこの病の根絶を期する為の国民運動に目覚めていただく」ことを要望しているが、前年(1931.6.25)の光田講演も末尾で「願はくば毎年陛下の御生れ給ひし今日を国民の血液を清むるの聖日となし、国民一致努力癩予防運動のために尽力せられん事を翼ふ。」と述べてたことと合わせて考えると、1931・1932年はともに「癩予防運動」への国民の「目覚め」を願い訴えるという啓発段階にあり「癩根絶」の「国民運動」は未形成であったことが確認できる。

(2) 林文雄の講演 (1932.6.23)

一方、三室戸のラジオ講演に2日先行して、6月23日にJOBK(大阪)より長島愛生園医官の林文雄によるラジオ講演「癩を救ふ三つの力」が放送されている。三室戸講演が東日本向けならば、林講演は西日本向けと言えよう。講演要旨は、「大阪朝日新聞」「山陽新報」等が報じ、講演全文は受信不能な関東(全生病院)のために林の計らいで「山桜」14巻8号(1932.8)掲載(『長島開拓』にも再録)された。ここでは、林の講演要旨を最も簡潔に報じている「山陽新報」¹⁴⁾の内容を次に示す。

「癩者は恐るべき病を持つと共に古来の天刑思想及遺伝思想によって二重の苦悩を負はされる。癩は遺伝に非ず癩菌によって起る伝染病なりと理解する事が、癩救済の第一歩である。欧米諸国には癩を見ない。隔離によって潔め尽した。文明国で癩の居るのは、日本のみである。昭和五年の調査によると、日本は一四二七三人の癩者が居る。実数は三万近くであろう。(中略)この癩の窮境を救ふ三つの力がある。第一は昭和五年十一月十日に皇太后陛下の日常御用度を節せられた二十四万八千円の御下賜である。これを最も悩めるもの、即ち癩者のために用ひられた。上皇室の御軫念これが最も大なる力である。今日は皇太后陛下の御誕生で慈の日として全国的に癩の救が叶(叫?)ばれる。第二の力は癩救護を受ける癩者自身がこの問題の為に決起した事である。数年来療養所内の病舎は醒めて来た。(中略)一人でも多くの同病者を救はねばならぬ。愛生園の十坪住宅はその発露で病者が家を建て追ひ返さるべき者に住居を与へる。最後に最も大なる力、癩を救ふべき力は何か、それは今これを読み、又今この放送に耳を傾けらるる諸君の愛である。」(下線は筆者)

下線部に示す林の「3つの力」は、「山桜」第15巻第6号(1933.6)に見るように1933年6月開始の「癩予防デー」に、「皇室の御仁慈」、「全国民の同情」、「療養所内同胞の覚醒」と簡潔に整理されて活用されていく。

(3) 地方における「癩病根絶期成同盟会」の開催状況

1932年6月25日を中心とする「癩病根絶期成同盟会」の地方開催が確認できるのは、目下のところ福島県である。

「福島民友新聞」は、「癩予防協会に寄附」¹⁵⁾との見出しで次のように報じている。

「福島県癩根絶期成同盟会は白石西三氏を会長とし佐藤澤、大原一両氏を副会長にとして昨年第一回大会を開催しその収益金を癩予防協会に寄附したのであったが、本年も右の提唱に賛し、六月廿三、廿四の両日慈善興行をなし、その収益金三十五円を他

の収入金十円とを合せ左の通り寄附した。

三十円癩予防協会へ知事経由 五円青森市北部療養所へ直送 五円仙台市長
町未感染児童保護会へ同 五円岡山県邑久郡長島愛生園へ同

また「福島民報」も「癩病根絶期成同盟会寄附」との見出しで同一の報道をしている¹⁶⁾。

(4) 「癩予防デー」の提案

1932年6月25日には、毎年6月25日を「癩予防デー」とすべきとする提案が出される。ひとつは、高野六郎(内務省予防課長)から、いまひとつは四谷義行(長島愛生園事務官)からである。

前者は、高野(=高野六郎)の巻頭言「癩デー」(「公衆衛生」第50巻6号、2頁、1932年6月25日発行)である。高野は、次のように述べている(下線は筆者)。

「六月中のデーとしては先づ六月四日の虫歯予防デーがある。(中略)若し今後新しいデーが六月中の予防行事として加はるとして、最も相応しいと感ぜられるのは、六月廿五日の癩予防デーである。六月廿五日は畏くも 皇太后陛下の御誕辰に当る。此の佳き日に陛下の深く御心を寄せさせ給ふ癩の予防を国民に呼びかけるのは大に時を得たものであることは明である。既に此の日を以て癩予防運動を行って居る団体もある。(中略)既に実施されつつある六月廿五日の癩運動にも多大の収穫あらしめたいものである。」

下線部中の「団体」の名称は明示されていないが、高野は、前年(1931年)8月の論稿「癩の根絶」(「公衆衛生」第49巻第8号)の中で「皇太后陛下御誕辰日を期して全国に癩根絶期成同盟会と称する運動が起ってかなりの成績を挙げた」(490頁)と記しており、希望社主導の「癩根絶期成同盟会」とその1931年6月25日の運動(さらに1932年6月の動き)を念頭に置いて「癩予防デー」を提案していることは明白である。

後者は、四谷による「医海時報」第1975号(1932.6.25発行)掲載の「癩予防デーの設定を提唱す」と題する文字通りの提案である。四谷は、次のように述べている。

「結核予防デーが設けられてから、既に幾年かを経過しているが、癩予防宣伝の為に未だ予防デーなるものが出来ていないのは残念である。私は今後毎年六月二十五日を以て癩予防デーとし、又はその日の前後一週間を癩予防週間にしたいものと衷心より翹望するものである。(中略)昨年の六月二十五日には、時の内務大臣安達謙蔵氏及国立癩療養所長島愛生園長光田健輔氏が、東京放送局より、全国に向けて、癩予防の放送をせられたが、本年その事のないのは残念至極である。尤も同日誰かが東京放送局より放送されるやうであるが、其様な催は恰も財団法人癩予防協会の如き、朝野の名士を網羅した全国的の団体が出来て居る今日、同会が中心になって、適当な人をして放送に当らしめ、又同時に全国各府県衛生当局者や癩療養所員を総動員して、各地に亘って、癩講演会を開催し、或は各療養所に慰問団体を派遣する等の企てがあるのが最も適切の方法であらうと思ふのである。(中略)何卒来年からは、必ずさういふやうな企が催ふされるやう、また国民上下が、常に癩予防根絶の重要事たるを認識し、官公私の予防施設を後援せられ、以て一人にても多くの不幸なる同胞が救はれ、一日も速に、日本国よりこの疾病が除かれるやう、念願して歇まないものである。」(1285頁)

四谷は、「昨年(1932)の六月二十五日」を念頭に、高野以上に具体的な案を提示しており、財団法人癩予防協会が中心になって「来年から」、すなわち1933年から「毎年六月二十五日を以て癩予防デーとし、又はその日の前後一週間を癩予防週間」として運動を展開すべきことを要望している。四谷提案の背後には当然ながら光田の意向があり、高野は癩予防協会の理事であることから、高野自身の提案と四谷提案とを受けて、1933年度から実施を推進したと考えられる。

それ以前の1931・1932年度の癩予防協会は、6月25日を全く意識していない啓発活動を展開していた。具体的には、1931年度の「癩予防思想ノ普及ノ為」の「講演会」は、山口県(1931.12.7~8)、鹿児島県(1932.1.15~17)、山梨県(1932.3.19)、東京府(1932.3.30)で開催され¹⁷⁾、1932年度のそれは、青森市・京都市・熊本市(1932.7.11)、盛岡市・佐賀県唐津市(1932.7.12)、山形市(1932.7.14)、福島市(1932.7.15)、熊本市(1932.3.30)、沖縄県名護町(1932.8.15)、山口県下6ヶ村(1932.10.1より1週間)、香川県(1932.10.10)、長崎市(1932.10.16)、松山市ほか5ヶ所(1933.2.6~10)で開催されている¹⁸⁾。

3. 1933年6月25日における「癩予防デー」の成立とその後の展開

「公衆衛生」第51巻第6号(1933年6月25日発行)の巻頭言(無署名)は、「癩予防デー」と題して次のように述べている。

「六月二十五日は 皇太后陛下御誕辰の佳日である。皇太后陛下の御誕辰日を以て癩予防デーとなすことの由縁は今更説くを須いない。(中略)癩予防協会が此の日に癩予防運動の氣勢を新たにしようとするのは誠に時を得たものである。然し癩予防デーは勿論癩予防協会のみの仕事ではない。又衛生関係者の仕事でもない。全く国民全体の仕事である。(中略)癩予防デーに際し我等は 皇太后陛下の御歌を有り難く拝誦する。

つれづれの友となりても慰めよ 行くことがたき我にかはりて

ここには癩予防協会が「癩予防運動の氣勢を新たにしようとする」ものとして1933年6月25日を「癩予防デー」としたことが示されている。

また同巻頭言は、「癩予防の根本方策」は、「収容施設の拡充」であり、その拡充と並行して「患者が喜んで療養所へ赴くの気風」の「馴致」にあること、「癩予防事業」の「真諦」は、「患者が療養所の生活に安住し、家庭の患者が進むで療養所の門を志すやうにすること」にあるとしている。

また癩予防協会『昭和八年度事業成績報告書(財団法人癩予防協会第三回事業報告書)』は、「癩予防デー実施」にあたり、同協会の設立趣意書やパンフレット「国から癩を無くしませう」を30万部印刷するなど、同協会の事業として昭和八年度から「癩予防デー」を推進したことが記されている¹⁹⁾。パンフ「国から癩を無くしませう」(発行日は癩予防デー後の1933年8月13日であるが)にも、「皇太后陛下の御仁慈」(1930.11.10の御下賜と1932.11.10の御歌)を受けて「癩予防協会が六月二十五日の陛下御誕辰の日を癩予防デーと定めこの前後数日にわたり癩の予防救護に就て全国民に呼びかけることに致しました²⁰⁾とある。

こうして1933年6月25日をもって第一回「癩予防デー」が設定・開始された。以後第八

回(1940年)までの展開をラジオ放送番組(東京朝日新聞等のラジオ番組欄)に注目して中央の取組を整理すると、次のようになる。

第一回(1933.6.25): 山本達雄(内務大臣)が、JOAKより「癩の予防根絶」を講演。

第二回(1934.6.25): 潮恵之輔(内務次官)が、AKより「先づ根絶せねばならぬ病氣」を講演。

第三回(1935.6.25): 前日の24日に光田健輔が、JOKK(岡山)より全国中継で「癩問題に関する婦人の責務」を講演。

第四回(1936.6.25): 林芳信(全生病院長)が、AKより「癩の予防と社会的施設に就て」を講演。

第五回(1937.6.25): 挟間茂(内務省衛生局長)が、JOCK(名古屋)より全国中継で「癩予防施設に就て」を講演。

第六回(1938.6.25): 廣瀬久忠(厚生次官)が、AKより「癩予防日に際して」を講演。

第七回(1939.6.25): AKより、午後3時から宮崎松記(九州療養所長)が「癩予防と婦人の力」を講演。午後(夜)に女優の田村秋子が物語「小島の春」(小川正子作・岸田國士編輯)を朗読。

第八回(1940.6.25): AKより、午前中に林芳信が「癩の知識」を講演、午後(夜)に吉田茂(厚生大臣)が「癩予防事業に就て」を講演。都市放送が24・25日の2日連続で朗読「小島の春」を放送。

このように1933~1940年の毎年6月25日を中心に途切れることなくラジオ番組が放送され「癩予防デー」が存続していたことが確認できる。1931年と1932年の「癩予防デー」を含めると10年間(計10回)となる。次に示す1935年6月の「台湾日日新報」²¹⁾の記事は、当時の1931(昭和六)年と1933(昭和八)年との関係を正確に報道していると言える。

「(皇太后)陛下の御誕生日たる六月廿五日を以て全国の癩浄化日なるものを設定し、昭和六年以来年々此日を以て癩の救療事業に対する宣伝行事を為し来り、本年は其の第五回に相当して居るが、本島としては台湾癩予防協会の設立された昭和八年より之を実施し本年は其の第三回目である。」

ここには、台湾では本国(内地)の癩予防協会の「癩予防デー」に歩調を合わせて、「癩浄化日」の第一回を1933(昭和八)年に開始し、1935年に第三回目(1931年から通算して第五回目)を迎えたとの認識が示されている。

4. まとめと今後の課題

本研究は、平田(2015)で不十分であった「癩予防デー」の成立過程をより詳細な検討し、さらにその後(1933~1940年)の展開過程の解明の手がかりとなる毎年6月25日を基本とするラジオ放送の存在を明らかにした。本研究の結果は、次のようにまとめられる。

「癩予防デー」には、1931年開始(1932年まで)の「癩病根絶期成同盟会」による「癩予防デー」と1933年開始(目下のところ1940年まで)の癩予防協会による「癩予防デー」の2つが存在したこと。

よって「癩予防デー」の開始においては1931年説も同1933年説もどちらも明確な根拠を持ち正しいと言えること(1932年説には根拠がなく成り立たないこと)。

しかし1933年開始の「癩予防デー」は、1931~1932年の希望社主導の「癩病根絶期成

同盟会」による「癩予防デー」(1932年は「癩運動週間」として)を基盤にし、それを継承して成立していたこと。

その継承にあたっては1932年の高野六郎・四谷義行による「癩予防デー」設定(前後の予防週間を含む)の提唱が橋渡しの役割を果たしていたこと。

結論として、「癩予防デー」を開始年と成立年とに区別して統一的に把握すること、つまり、「癩予防デー」は広義に解釈すれば事実上1931年6月25日をもって開始され、狭義(厳密)に解釈すれば1933年6月25日をもって「癩予防週間」を前後に含む「癩予防デー」が成立したと整理できること。

今後の課題は、「無癩(県)運動」との関係性に注目した「癩予防デー」の展開過程(1933~1940年及び1940年代前半の終戦まで)の実証的な解明である。

<注>

- 1) 平田勝政「日本ハンセン病社会事業史研究(第7報) - 希望社のハンセン病救済運動と「らい予防デー」の成立 - 」『長崎大学教育学部紀要 - 教育科学 - 』第79号, 65-76頁, 2015年3月
- 2) この他に『大阪朝日新聞(地方版)』の調査により, 下記の補足資料が発見されている。
 - 「希望社修養会」『大阪朝日新聞(三河版)』第17822号, 9面, 1931年6月23日
 - 「癩病根絶期成同盟会, 廿五日に発会式」『大阪朝日新聞(三重版)』第17819号, 9面, 1931年6月20日
 - 「癩病根絶期成同盟大会」『大阪朝日新聞(京都版)』第17824号, 9面, 1931年6月25日
 - 「慈善講演会」『大阪朝日新聞(岡山版)』第17805号, 9面, 1931年6月6日
 - 「癩病根絶講演と映画の夕」『大阪朝日新聞附録九州朝日(北九州版)』第1911号, 9面, 1931年6月24日
- 3) 「希望社の講演会, 癩予防協会の趣旨に賛して」『弘前新聞』第11133号, 4面, 1931年3月12日
- 4) 「講演と映画, 希望社主催で」『大阪朝日新聞(大阪版)』第17812号, 9面, 1931年6月13日
- 5) 「癩根絶運動, 講演と映画の会」『大阪朝日新聞』第17826号, 5面, 1931年6月27日
- 6) 「癩を根絶せよ」『大阪朝日新聞(大阪版)』第17827号, 9面, 1931年6月28日
- 7) 「根絶講演会」『大阪朝日新聞(神戸版)』第17820号, 13面, 1931年6月21日
- 8) 「癩病根絶期成会で資金を募集する, 廿五日講演と演芸会」『大阪朝日新聞(神戸版)』第17824号, 9面, 1931年6月25日
- 9) 「レプラ根絶講演会」『大阪朝日新聞(鳥取版)』第17822号, 9面, 1931年6月23日
- 10) 「米子市の苦闘」『希望の日本』第68号, 8頁, 1931年8月
- 11) 「悪病予防講演」『大阪朝日新聞(岡山版)』第17820号, 9面, 1931年6月21日
- 12) 『日本MTL』第18輯, 4頁, 1932年7月の雑報より
- 13) 三室戸敬光「国民の保健とらい病」『東京朝日新聞』第16581号, 5面, 1932年5月25日

「東京朝日新聞」は「らい」とひらがな表記，他紙は「癩」と漢字表記である。

- 14) 林文雄「癩を救ふ三つの力」『山陽新報』第17761号，5面，1932年5月23日
- 15) 「癩予防協会に寄附，慈善興行の収益」『福島民友新聞』第11970号，3面，1932年7月1日
- 16) 「癩根絶期成同盟会寄附」『福島民報』第13582号，1面，1931年7月3日
- 17) 癩予防協会『昭和六年度事業成績報告書』69頁，1933年（藤野豊編・解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成<戦前編>』第3巻所収：資料48，151頁，不二出版）
- 18) 癩予防協会『昭和七年度事業成績報告書』20頁，1934年（藤野豊編・解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成<戦前編>』第3巻所収：資料57，247頁，不二出版）
- 19) 藤野豊編・解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成<戦前編>』第4巻所収：資料66，35頁，不二出版
- 20) 藤野豊編・解説『近現代日本ハンセン病問題資料集成<戦前編>』第3巻所収：資料50，150頁，不二出版
- 21) 「(社説)台湾に於ける癩根絶の方策」『台湾日日新報』第12656号，2面，1935年6月25日

(付記) 本研究は，日本社会福祉学会第62回秋季大会（2014年11月30日，於・早稲田大学）において発表した「1930年代のハンセン病社会事業に関する研究（第1報）- 「らい予防デー」における中央の取組の検討 - 」の一部（主に1931～33年の部分）に，その後の調査（2015年度）で得られた知見を加え，大幅に修正・加筆してまとめたものであり，2015年度科学研究費補助金（課題番号23530724）による研究成果の一部である。